

アメリカ西部にかんする言説の系譜学的分析 ——19世紀前半における遠征記録の変容について——

A Genealogical Analysis of Discourse on the American
West:

On Transformations of Expedition Records 1800-1850

青山 賢治

Kenji AOYAMA

1. 問題の所在

アメリカの「西部」とはどこにあるのか。アメリカ合衆国の領土は、19世紀をつうじて西方へ拡大し、「西部」と称される地域も漸次移動した。G. M. Bakken らが示すように、「西部」は移動し変化し続けてきたものであり、その指示対象を固定することも、その意味を定義することもできない (Bakken and Farrington eds. 2000)。

F. J. Turner は、西部フロンティアの移動を歴史学として記述し、そこからアメリカ文化の源泉を問い返そうとした (Turner [1883] 1966)。だが、Turner の問いそのものがイデオロギー的であったこと、フロンティアという語があまりに多義的に用いられていたことから、その試みは頓挫したとされる (Limerick 1994)。

西部フロンティアは、アメリカ人の神話ともいわれる (Slotkin 1994)。「西部的なもの (Western)」として語られてきたのは、必ずしも歴史的事実ばかりではない。むしろ、真偽の区別を問題とせず、事実や実体への参照を必要としないかたちで、数多くの伝説的人物、逸話、物語が語られてきた。19世紀末のフロンティア消滅後も、舞台、映画、ラジオ、テレビなど、新メディアへの

移行をくり返しながら、「西部的なもの」が語られた。

だが、「西部的なもの」や「フロンティア」という実体の定かでないイメージ領域を介して、アメリカ人とは何者かが問われるようになったのは、いかなる言説配置の効果であろうか。本稿は、こうしたアメリカのフロンティア、あるいはフロンティアとしてのアメリカをめぐる系譜学的研究の一環である。ここでは、19世紀前半のアメリカ西部にかんする言説編成が分析される。

19世紀初頭、西部のほとんどは未踏であり、未知の空間について語りうる人々は限られていた。未知はどのようにして語りうる対象とされ、既知の領域へ組み込まれていったか。西部をめぐる言説において、表象（不）可能なものはどのように位置づけられ、あるいは排除されたのか。遠征の記録や報告は、どのように蓄積され、差異化されていったか。未知とも既知ともつかない、実体の定かではないイメージ領域を介して西部が語られるようになるとき、どのような言説編成の変容が起こっていたのか。

本稿は、未知と既知の境界、語られることと語られないことの境界についての調査、分析である。19世紀初頭における西部遠征の記録は、M. Fouault のいう西欧の博物誌、すなわち連続的な表象空間という企てのうちにある¹⁾。だが、1830年代にトラッパーたちによる未知との接触が語られた後、1840年代に移民ガイドブックが登場すると、表象空間によく似た、諸言説の記号論的並置²⁾が起こる。

19世紀前半のアメリカ西部にかんする先行研究としては、H. M. Chittenden、B. De Voto、W. H. Goetzmann、W. H. Goetzmann と W. N. Goetzmann による一次資料の調査がある。ただし、De Voto や W. H. Goetzmann では、国家間の関係が分析枠組みとして強く前提されている (De Voto 1952; 1989; Goetzmann 1978)。Chittenden および W. H. Goetzmann と W. N. Goetzmann では、近代の科学的進歩とロマン主義的想像力が二項対立

として前提されている (Chittenden 1986; Goetzmann and Goetzmann 1986)。いずれの研究もこうした前提のもとで、記録間の影響、精度、価値を評価している。だが、本研究では、不確かな記録や想像力によるイメージ群の増殖もまた、言説上の出来事として分析される。

2. 初期の博物誌的、地誌学的記録

アメリカ合衆国第3代大統領 T. Jefferson は、1803年10月のルイジアナ購入から約半年後、大陸極西部へ調査遠征のために M. Lewis 隊を派遣している。アメリカ哲学協会の会長でもあった Jefferson は、すでに1783年から二度にわたって博物誌の調査遠征を企図し、いずれも失敗に終わっていた (McKelvey 1956: 67-8)。ようやく実現した Lewis 隊の派遣にあたり、彼は調査項目、記録の作成、管理について、詳細に指示を出していた。観察され、記録されるべき項目は、緯度経度、土壌、地勢、天候、植生、動物、鉱物から、インディアンの作法、性向、言語まで、広範に及ぶ (Jackson ed. 1962: 61-5)。広義における博物誌 (natural history) は、自然の植物や動物から、岩石や地形などの地誌学 (geography)、人間本性 (human nature) と諸民族の生活まで、すべてを総覧する企てにあたる。

Lewis と W. Clark 隊による極西部遠征は、事前から周到に計画されていた。Lewis は当初、天文学、地誌学、植物学などの専門的スキルを持ち合わせておらず、フィラデルフィアで短期間の専門的訓練が必要とされた。アメリカ・リンネ協会の会長となる B. S. Bartman らが立ち会い、協力している (Jackson ed. 1962: 16-8; Goetzmann 1978: 4-6; McKelvey 1956: 68)。こうした計画的調査は、ヨーロッパの博物誌と同じ方法を、アメリカ西部にも適用することで可能となった。

したがって、Lewis と Clark による遠征記録の形式は、アメリ

カ特有のものではなく、西部に特有のものでもない。むしろ、ヨーロッパの教育機関で専門的技能を習得した人物が、北アメリカ大陸の各地で記録を残していった。たとえば、イギリス生まれの D. Thompson は、地誌学や測量術を学んだ後にカナダへ渡って、測量を続けた (Tyrrell ed. 1916)。J. Bradbury はイギリスからルイジアナへ渡り、1809 年、リンネ植物学の専門家として初めてアメリカ西部のミズーリ河へ遠征した (McKelvey 1956: 107-9)。ジェノヴァで植物学、動物学の専門家となった J. L. Berlandier は、メキシコ軍の遠征に同行し、メキシコ北部とテキサスを調査した (Lawson 2012)。北アメリカとヨーロッパは博物誌という同じ地平上にあり、標本の蒐集、記録の蓄積という企てのなかで連動している。

Z. Pike 隊による 1805-07 年の遠征、S. Long 隊による 1819-20 年の遠征でも、博物誌的調査は継続される (Pike [1810] 1966)。とりわけ後者は、蒸気船を利用した大規模な遠征計画であった。調査項目の詳細な指示はもちろんのこと、Jefferson から Lewis に宛てられたかつての指示書も参考のために引用されていた (Chittenden 1986: 565)。未知の空間を踏破しようとする博物誌の記録は、年月を越えて同一の企図のうちにあった。

公的に派遣された遠征隊ばかりではない。民間毛皮会社による日誌についても、記録形式は同様である。J. C. Luttig の日誌や W. H. Ashley の書簡は、記述される項目が一定している (Drumm ed. 1920; Morgan ed. 1964)。

初期の遠征記録では、観察対象と記録項目は、調査者や記録者によって大きく変わるわけではない。したがって、同行者たちの記録は互いにそれほど大きく異なるものではなく、相互の記録が参照される場合もあった (Evans 1997: 28)。また、地点が違って、記入されるべき事項には変わりがない。未知の領域へ踏み入れるにつれて、調査されるべき項目は記録で充たされていく。

記録項目の一貫性をつうじて、未知は既知へとなだらかに組み込まれ、認識を介した空間的連続性のなかで西部は語られる。

博物誌では、観察されるがままのことが記録され、その記録は、観察された通りのものを語らなければならなかった。観察と記録は、よく定義された名辞によって折り重ねられる。見られるものと語られるものは、名辞による表象の二重化をつうじて重ね合わせられる (Foucault 1966: 132-3 = 1974: 143-4)。「われわれは、眺められている対象のいくつかの部分について、定義づけられた言語のようなものを用いなければ、遠くへ進むことはできない」(Nuttall 1827: 2)。

もっとも、初期の西部遠征では、植物学や動物学などの専門家として、学術用語を用いながら種や属を分類できる者は、わずかであった。それゆえ、多数の項目について記録を蓄積していく日誌群が残された。そこでは緯度経度が測量され、特徴のある地形に名辞が付与され、見たことのない植物が蒐集された。測量表、標本、地図といった一覧表が作成された。こうした記録の蓄積による表象空間が拡張するかぎりにおいて、西部は語りうるものへと転じられた。

3. トラッパーたちの「冒険」

1830年代以降、博物誌とは異なる言説が現れる。それは必ずしも知として蓄積されるべき記録ではなかった。ある種の観察をつうじて成立するその言説は、読みとられるべき内容を、すぐに告げようとはしない。見られることと語られることは、表象において折り重ねられるのではなく、むしろそこにいつも隔たりが存在する。

歩兵の足跡、銃声、見知らぬ馬上の人々、遠くの火から立ちのぼる蒸気といったことを記すのは、読者にとって瑣末事に思わ

れるかもしれない。しかし、最も重要な出来事がこのような徴候 (sign) でしか示されない地域にあって、これらは些細な出来事どころではない。(Ferris [1843-44] 1983: 175)

毛皮会社のトラッパーたちによる報告や逸話は、遠征中に遭遇した偶発的事象にかかわる。事故、狩猟、戦闘、悪天などにかんする危険、困難がとりわけ多く記される。すなわち、彼らは、認識された既知の領域として西部を語ろうとするのではない。むしろ、西部での生活が、いかに未知なるものとの接触に晒され、流動的で、不確定であるかを語る。

トラッパーたちにより観察される多くの徴候は、つねに同一のものを表象するわけではない。ひとたび消滅すれば、同じ徴候がいつ、どこに再び現れるのかを知ることもできない。徴候と、それが告げる内容との間には、定義づけられた言語のような規則性があるわけではない。

……宵の口、私は何だか耳慣れない音に警戒がたかぶった。われわれの馬がただ足踏みしているだけだったかもしれない。それでも、行く先の不吉を予示するような想念の連なり (trayne of thoughts) も相俟って、目を閉じて眠りに落ちることは、すっかり妨げられた。(Ferris [1843-44] 1983: 205)

「耳慣れない音」は、吹きぬける風、動物、インディアンのおずれによるものであるか分からない。過度の警戒や連想によって、徴候なきところに徴候があると信じられているだけかもしれない。徴候はいくつもの想念を呼び込むが、その読解は、正誤の区別がつかないままに終わることも多い。徴候はつねに同一のものを表象するのではなく、「保留 (suspension) と理解 (apprehension) の間」にあって、測り難いものを残す (Ferris [1843-44] 1983:

129-30)。

徴候がどこに発見されるか、それが何を告げるか、ある徴候とそれが告げるものとの間にはいかなる関係があるか。トラッパーたちの観察は、表象の規則化された配列、秩序のなかでは解決されない。それどころか、自分たちの身振りが、知らぬうちに敵に向けて徴候を発してしまうこともある。火を起こすことが結果として、「仲間全員を敵対的インディアンへ譲り渡す」ことになりうるように (Coyner [1850] 1969: 44; Pattie [1831] 1984: 24)。

徴候の見落とし、別の対象との類似、敵によるカモフラージュ、想像力による混乱もまた、トラッパーの報告に含まれる (Pattie [1831] 1984: 20, 29, 31-2, 43)。博物誌であれば、いずれも不正確な表象として排除されるはずだが、トラッパーの言説において、それは「冒険」や「興奮」として、積極的に語られるべき対象へと転じられる。トラッパーたちの西部は、既知と未知のあいだをつねに揺れ動く。

よく知られたルートであっても、徴候は現れたり消えたりして、警戒を喚起する (James [1846] 1984: 39)。西部にはこうした測り難い残余があり、それが未知として、文明化されていない未開として語られていく。一定の規則や方法では読解しえない徴候の揺らぎ、そして読解の失敗は、西部の未知が痕跡として刻まれるところとなる。

だが、トラッパーたちは、徴候における「保留と理解の間」をわざと増幅させて、想像力の介在しうる余地を広げていくことをもしていた。「間一髪」の危機を、どちらへ転ぶとも知れないように誇張を混ぜながら語る。「超自然的な力」といった表現を人物に用いたりする (James [1846] 1984: 31)。したがって、トラッパーたちの報告には、誇張や作話が紛れており、日付や場所が不正確なことも多い。先行する報告について、別のトラッパーによ

る批判があり、あらためて報告が語り直される (Haines ed. 1965; Morgan and Harris eds. 1967)。

では、西部の未知を、誇張によって膨らませている想像力は、どこからやって来るのか。トラッパーたちの誇張や作話は、まったくの気まぐれではなかった。西部における未知と既知の間から切り離されるとき、トラッパーたちの想像力は西部の外へと向かい、遠く隔てられた東部のことが語られる。

実際の状況とは際立った対照をなすように、家郷での思い出が、その務めや悦びとともに精神に浮かんできた。(Pattie [1831] 1984: 37)

私は恐怖、疲労、寒さ、空腹のせいで眠れないまま、ペンシルヴァニアの村落の一夜とロッキー山脈の一夜の際立った対照を考えながら横たわった。牛引く少年の口笛も、草原ではしゃぐ子供たちの声も、家畜の鳴き声も、晩鐘の深い響きも聞こえてこない。野生動物の遠吠え、啓蒙されざる未開人の鬨の音が偶然に聞こえてくるほかは、耳に飛び込んでくる音がまったく無い。(Leonard [1839] 2001: 29-30)

トラッパーたちの「冒険」は、表象の連続的空間のなかではなく、むしろ空間的隔たりを媒介にして成立する。その隔たりとはまず、徴候とそれが告げるもの、既知と未知の間にある測り難い揺れである。だが、もう一つの空間的隔たりがある。東部にいる読者からの空間的隔たりである。西部にあって東部を想起しているかのような上記の引用は、実際のところ東部にあって、西部のことが想起されたものである。

トラッパーたちの「冒険」では、西部がいかに東部と異なった空間であるか、誇張や作話を交えながら語られる。西部からの空

間的隔たりを媒介することで、想像力の揺らぐ領域は、増幅されることも縮減されることもある。広大な西部には、想像を超える現実的なものがあるのか、それとも現実的なもの以上に想像的なものが膨らんでいるのか、区別は困難である。

西部からの広大な距離に隔てられて、トラッパーの報告のどこに、どれほどの誇張や作話があったのかは、測り難い。空間的隔たりこそが、想像力の揺らぎを可能にする余地となり、真偽の区別が定まらないイメージ群の増殖を可能にする。西部の未知とは、ある地理学的境界の西側にばかり帰属するものではない。西部からの空間的隔たりをスクリーンとして投影される「冒険」のイメージ群もまた、未知と既知の間における揺れを増幅させるものであった。

1830年、J. O. Pattie はシンシナティにある『ウェスタン・マンズリー・レビュー』誌の編集部を自ら訪れて、回顧録を翌年出版した。Z. Leonard は1835年にロッキー山脈から帰還すると、故郷ペンシルヴァニアの地元紙に「冒険」の記録を発表し、大幅な加筆を経て1839年に書籍を出版した。文筆家として名声を得ていた W. Irving は、長期にわたるヨーロッパ生活から帰国後、Captain Bonneville の日誌を本人から購入し、その「冒険」を作品にした。Leonard と Captain Bonneville による遠征は同じものであったが、彼らの「冒険」は内容も文体も違う。W. A. Ferris は1843-44年、ニューヨーク州バッファローの雑誌に「冒険」の報告を発表した。これらはいずれも、東部での出版を前提に執筆された。

1809-10年および1821-24年の遠征について、T. James が回顧録を発表したのは1846年、イリノイ州ウォータールーの週刊誌上であった。1859年に出版された『消えたトラッパーたち』という書籍は、「ロッキー山脈における興味深い場面、出来事のコレクション」という副題をもつ。その作者 D. H. Coyner によれば、

E. Williams による 1809 年以降の遠征記録が原資料であるという。これらはいずれも、博物誌的記録が作成されていた時期の遠征にかんして、後年執筆されたものである。だが、そこには多くの誇張が含まれる。後者にいたっては、Chittenden が作話ばかりであると批判している (Chittenden 1986: 645-9)。

1830 年頃から増殖した西部の言説に、トールトークがある。西部開拓者たちが大げさに西部の出来事を語り、冗談か本気か、事実か作話を区別し難いようなイメージ群を紛れ込ませたものである。誇張されたイメージ群を介して、東部人と西部人のあいだに挑発、嘲笑、対立、すれ違いなどの曖昧な関係を演じさせる文芸的小話が、新聞や雑誌に出回った。とりわけ、ニューヨークの『スピリット・オブ・ザ・タイムズ』誌は、1830 年代後半から、西部の開拓民により語られたトールトークを積極的に蒐集し、出版を促した。トラッパーたちの報告には、こうしたトールトークも混ざっていた (Leonard [1839] 2001: 44-50; 青山 2014)。

4. 移民ガイドブック

毛皮会社によるビーバー猟は、1830 年前後に最盛期を迎えた後、乱獲や市場価値の変動もあって、衰退へ向かった。1840 年代にロッキー山脈越えを目指すようになったのは、生活道具を積載し、老人や子供をも連れたワゴンの隊列であった。アメリカ合衆国にオレゴンやカリフォルニアが併合されることが見越された 1842 年頃から、先んじて移住を試みる人々による「オレゴン・フィーバー」が起こった。

移民たちは、未踏の空間を踏破するのではなく、予め整備されたルート上に隊列をつくり流れ込んだ。安全に一度きりの移動を果たすことがその目的であって、調査遠征隊やトラッパーのように移動生活を続ける人々ではなかった。

すでにトレイルが整備されつつあったことから、博物誌の観察

記録や、冒険の読み物は、欠かすことのできない資料であったわけではない。だが、移動ルート、交通手段、移住先などの選択にあたり、参照すべき資料は以前にも増して必要とされた。移民ガイドブックとして用立てられたのは、博物誌的、地誌学的な概観と、冒険の報告をいずれも併せもつような旅行記である。

1842年、イリノイ州の農民 J. Palmer は、移住の事前調査としてオレゴンへ赴いた。彼の日誌には、大平原からロッキー山脈や太平洋岸までの往復で用いられたルート、各地方の地形、天候、土壌、植生などにかんする観察が記録されている。オレゴン近辺について、どの一帯で資源開発や都市化といった変化が起こりうるかも予測されている。こうした観察と並んで、そこには偶発的事象をめぐる報告も記された。インディアンとの交渉、隊列の分散状態における襲撃の危険、馬や家畜の略奪、リーダーの交替など。Palmer の日誌は、西部についての読み物にもなれば、移住や投機の参考資料にもなる旅行記であった (Palmer [1847] 1966)。

博物誌的記録と冒険物語が混在するのは、個人的な旅行記ばかりではない。政府派遣の公式調査として、J. Frémont は 1840 年代に数度、西部へ遠征を行っている。植物学者、地理学者など専門家を随行した遠征調査は、精密度や網羅性などにおいて大きな向上があった。だが、その報告書は本人ではなく、妻によって代筆された。

Frémont の妻は、誇張された逸話を挿入することで、同行者の K. Carson を英雄的人物に仕立て上げた。報告書は、冒険的読み物にもなるように書かれたこともあり、1845 年の出版後、類書を上回る読者を得た (Goetzmann 1978: 244)。Lewis と Clark 隊のときは、代理人がフィラデルフィア中を奔走してようやく報告書の出版社を見つけたという (McKelvey 1956: 69)。これとはまったく対照的である。Frémont 隊の報告書は、移民広告とし

ても機能した。B. Young 率いるモルモン教団は、この報告書をきっかけに西部への拠点移動を決断したといわれる (De Voto 1989: 47-8)。

実のところ、1840 年代以前にも、ヨーロッパやアメリカ東海岸からの移民向けにガイドブックが出版されている。だが、それは旅行の記録という形式をとるものではなかった。むしろ、州や地方ごとに、面積、地形、気候、植生、人口といった項目があり、その描写や数値が与えられる。すなわち、ガイドブックとされたのは、博物誌的な記録を簡略化し、概観するものであった (Colton 1832; Peck 1836)。

また、博物誌家による記録のなかには、後の移民ガイドブックに似たものがある。イギリス生まれの植物学者 J. Bradbury は、法律家 H. M. Brackenridge と友人であり、両者の旅行記がいずれも 1817 年に出版されている。

Bradbury は、日誌形式で旅行者の視点を記録するが、そこには徴候をめぐる読解があるなど、トラッパーの冒険物語にも似たところがある。ただし、ガラガラ蛇からの「ぎりぎりの回避 (a narrow escape)」は、わずか二文で言及が終わり、誇張の余地はまったくない。熊からの襲撃が語られる際には、母熊による子熊の防衛習性について補注が添えられる (Bradbury [1817] 1966: 35, 46)。日誌全体にわたり、植物の分布や発見が学術用語で記されており、巻末にはオサージュ族の言語、ミズーリの地誌、稀少植物のカタログが付されている。

Brackenridge のほうは法律家であり、自分が博物誌の専門家でないことを幾度も断る。旅行記がもつ曖昧さについて、次のように細やかに分節する。

この種の文章〔旅行記。引用者注。〕は、特有の適切な様式を

必要とするものではない。歴史の高貴な歩み、想像力がつくりだす鮮やかさ、純粹に学問的な (scientific) 厳密性と規則性を要求するものでもない。それでいて、それらすべてが幾らか、適切に認められる。文字を知らぬ者にも、博識者にも、同じように開かれているといえるかもしれない (Brackenridge 1817: 10)。

旅行記の位置づけは、1840年代の移民ガイドブックとよく似ている。だが、Brackenridgeの場合、ルイジアナなどの歴史、遠征記録について関連文献を渉猟したうえで、その誤りや誇張を修正し、いずれの書物にも重複しない記録を作成することが目的とされる。既知となった記録の蓄積に、何を付加するかがつねに問題とされる。「博物誌家 (naturalist) でない者として、私はただ、博識者に開かれた広範な領野 (extensive field) に、いくつかの観念を付与しようと試みるだけである」(Brackenridge 1817: 112)。動物、植物、鉱物にかんして、未確認の種 (non-descript) を中心に、名辞と特徴が列挙され、友人 Bradbury の記録と照合される。

Brackenridgeによれば、旅行中の風景 (landscape) について、詩的想像力が要求されることがある (Brackenridge 1817: 73-4)。だが、伝聞や想像力によるイメージの揺れは、つねにその範囲を制限されている。「私がいま与えた記述は、信用できる狩猟者たちから提供されたものである。私が自分自身で見たものは、ずっとスケールが小さかった。だが、彼らの説明が信じられないものでは決してないという満足をもたらした」(Brackenridge 1817: 78)。

1845年に出版された L. W. Hastings の移民ガイドブックと比べてみよう。Hastings は、オレゴンとカリフォルニアをめぐる博物誌的、地誌学的な概観を与えているほか、自分自身が参加し

た移民隊の旅行記を配置している。ミズーリ州インディペンデンスを出発してオレゴンまで、そしてオレゴンからカリフォルニアまで、自らの道中を冒険物語のような読み物として記している。博物誌と冒険物語の並置により、それは移民用の資料にも、読み物にもなりうる。

Hastings は従来の文献では扱われてこなかった内容として、目的地への各種ルート、移民隊に必要とされる装備、物資という「実用的情報」を加えているという (Hastings [1845] 1989: 3-4)。博物誌と冒険物語を並置し、既存の文献資料には記されていなかったことを書き加えていく点で、Hastings のガイドブックは、Bradbury や Brackenridge の旅行記に似ている。

だが、1810 年代の旅行記と 40 年代の Hastings によるガイドブックは、まったく異なる言説編成に属する。インディアン の急襲という逸話で、Hastings は最上級の修辭ばかりを続ける。「最も敵対的な態度」、「最大の猛々しさ」、「最もひどく悪魔的な雄叫び」、「最も恐ろしい仕草」(Hastings [1845] 1989: 11-2)。最上級の修辭をつうじて想像力の余地が残されるのは、トラッパーの冒険物語における誇張と同じである。

ただ、Hastings のガイドブックは、トラッパーの冒険物語とも異なる。Hastings は、徴候とその読解の間にある、測り難い部分を語ろうとしていたのではない。未知なるものとの接触、既知と未知の境界については、詳細な記述が省かれていた。「これらのページで企図されているのは、オレゴンとカリフォルニアを広範に (in extenso) 扱うことではなく、これらの地域について簡潔かつ実用的な記述を与えることである」(Hastings [1845] 1989: 3)。

そのガイドブックには、旅程の一部について、偶発事への予期や準備が不要であるかのような記述さえある。「新しい旅の方法にまったく馴染みがなく、案内人を得ることもできなかったこと

から、われわれは旅程のこの部分について多大な困難、苦難を予期していた。だが、予期したよりもずっとわずかな困難にしか遭遇せずに進んだ」(Hastings [1845] 1989: 20)。

未知と既知という境界の抹消は、さらに別のかたちをとった。Hastings はカリフォルニアへ「最も直行するルート」として、フォート・ブリッジャーからソルトレイクの南岸を通るトレイルを紹介していた (Hastings [1845] 1989: 137-8)。だが、それは1845年にHastingsがFrémont隊から聞き及んだばかりの、地図上に引かれたルートにすぎなかった。移民隊はおろか、著者自身さえ一度も踏み入れたことのないほぼ未踏のトレイルが、「実用的情報」として記入されていた。

実体の定かではない、伝聞によるルートが、他のガイドブックとの差異をつくり出す情報として書き込まれ、最上級の修辭を付されていた。そのガイドブックを成立させていたのは、諸言説の区別なき、無差別 (indifferent) な並置である。著者本人による観察、博物誌や新聞からの引用、旅行記、誇張された冒険物語、伝聞による地図上のルート。こうした諸言説がいずれも区別されることなく、「実用的」とされるかぎりで並べられていた。博物誌における隣接関係の分析、分類体系はそこになく、むしろ記入された情報は、相互の差異 (difference) に無関係、無関心 (indifferent) である。想像的なものと現実的なものが区別されずに並置されたガイドブックは、記号論的空間への移行によって成立していた。

Brackenridgeにおける観察の記録は、「博識者に開かれた広範な領野 (extensive field)」を踏破するべく、少しずつ蓄積されていくものであった。だが、Hastingsはオレゴンやカリフォルニアの全てを「広範に (in extenso)」扱うことを、はじめから問題としなかった。1810年代の博物誌的な旅行記と、諸言説が無差別的に並置された40年代の移民ガイドブックは、互いによく

似ており区別し難い。だが、そこには大きな断層がある。ある移民隊が、ガイドブックの記号論的空間へと入り込んでいったとき、そこに大惨事が起きることになった。

5. 記号論的空間の出来事

イリノイ州の裕福な農民であった G. Donner は 1846 年、移民隊のリーダーとしてカリフォルニアへ向かっていた。極西部への移住を決めた彼の蔵書には、T. H. Benton 上院議員のスピーチ、Frémont の遠征報告書、Hastings のガイドブックがあったという (Stewart 1960: 12)。

Hastings は 1845 年のガイドブック出版後、46 年初頭によく「最も直行の」ルートへと踏み入れていた。少数の馬乗りによるその縦走は成功した。だが、老人や子供を抱えた幌馬車の隊列をそこへ入り込ませることは、まったく別の話であった。

Donner 隊がそのルートへ踏み入れたとき、急峻な溪谷や山岳地帯が次々に立ちはだかり、前進は困難を極めた。たびたび停滯を余儀なくされた一行は、予定よりも大幅な遅れをとった。そして 11 月、ロッキー山脈のただ中で積雪期に見舞われた一行は、深雪によって身動きが取れなくなる。彼らは翌春まで約半年間、雪中に幽閉されることになった。

救出が行われたとき、死者は約 40 名に上った。絶えて食糧のなかった彼らの間では、人肉食が行われていたことも判明する。救出時、現場にはミイラ化した死体、砕かれた頭蓋骨などがあったという。「これほど不快でぞっとする光景は見たことがない」と評された (McGlashan [1879] 1966: 183)。

開拓移民隊を襲った西部の惨劇は、ニュースとして瞬く間に広まった。一行の日記や書簡、インタビューのほか、虚実の定かではない逸話が、新聞、雑誌、書物に出回り、複製された。とりわけ人肉食にかんして、実体の定かでないイメージが増殖した。救

出の現場には「人間の生き血が入った二つのやかん」があったというような誇張された逸話が、生々しくセンセーショナルに語られた (McGlashan [1879] 1966: 177)。

惨劇の現場はやがてドナー湖と呼ばれ、鉄道で近づくことのできる観光名所へと変わっていった。多くのグッズ類が商品化されもした。そのイメージ群は、惨劇を記憶に刻み込むものであったかもしれないが、冗談じみた逸話のもたらす興奮のうちに、惨劇を忘却させるものであったかもしれない。いずれにせよ、誇張され、歪められた夥しいイメージ群は、Donner 隊を見舞った惨劇の一部として複製、反復され続けている。

Donner 隊による歩みは、悪路、インディアン、荒天、飢餓による苦難続きであり、トラッパーたちの冒険のようでもあった。だが、決定的に彼らを惨劇へと追い込んだものは、そのいずれでもなかった。地図上の表象としてのルートと、不確かなイメージを区別しえなかったところに、惨劇は起こった。西部の未知が彼らを襲ったのではない。博物誌と実体なきイメージを均しく並置してしまう記号論的空間のなかにこそ、予期のできない不確実性が紛れ込んでいた。

西部の歴史を語ることは、記号論的空間のこうした歪みを語ることでもある。

【注】

- 1 西欧の古典主義時代における表象の分類体系化の企てについて、Foucault (1966=1974) を参照。
- 2 Baudrillard によると、想像的なものと現実的なものの区別が消え、実体や真理の探究を支えてきた現実が蒸発するところに、記号化が起こる (Baudrillard 1976: 7-12=1992: 11-9)。本研究は、生産力の余剰から消費社会化が起こる以前に、空間の余剰から記号論化された空間編成が起こったという仮説を論証する試みの一環である。青山 (2014) を

参照。

【一次資料】

- Brackenridge, Henry Marie, 1817, *Views of Louisiana: Containing Geographical, Statistical and Historical Notices of That Vast and Important Portion of America*, Baltimore: Schaeffer & Maund.
- Bradbury, John, [1817] 1966, *Travels in the Interior of America*, Ann Arbor: University Microfilms.
- Colton, Calvin, 1832, *Manual for Emigrants to America*, London: F. Westley & A. H. Davis.
- Coyner, David H., [1850] 1969, *The Lost Trappers*, Glorieta: Rio Grande.
- Drumm, Stella M. ed., 1920, *Luttig, John C.: Journal of a Fur-Trading Expedition on the Upper Missouri: 1812-1813*, St. Louis: Missouri Historical Society.
- Ferris, Warren Angus, [1843-44] 1983, *Life in the Rocky Mountains: A Diary of Wanderings on the Sources of the Rivers Missouri, Columbia, and Colorado, 1830-1835*, Denver: Old West.
- Frémont, John Charles, [1845] 1966, *Report of the Exploring Expedition to the Rocky Mountains*, Ann Arbor: University Microfilms.
- Haines, Aubrey L. ed., 1965, *Osborne Russell's Journal of a Trapper*, Lincoln: University of Nebraska Press.
- Hastings, Lansford W., [1845] 1989, *The Emigrants' Guide to Oregon and California*, Massachusetts: Applewood.
- Irving, Washington, 1837, "The Adventures of Captain Bonneville," Washington Irving, 2004, *Three Western Narratives*, New York: Library of America.
- Jackson, Donald ed., 1962, *Letters of the Lewis and Clark Expedition with Related Documents 1783-1854*, Urbana: University of Illinois Press.
- James, Thomas, [1846] 1984, *Three Years among the Indians and Mexicans*, Lincoln/London: University of Nebraska Press.
- Leonard, Zenas, [1839] 2001, *Narrative of the Adventures of Zenas Leonard: Five Years as a Mountain Man in the Rocky Mountains Written by Himself*, California: Narrative Press.
- Lewis, Meriwether, [1814] 1966, *The Expedition of Lewis and Clark*, Ann Arbor: University Microfilms.

-
- Morgan, Dale L. ed., 1964, *The West of William H. Ashley*, Denver: Old West.
- Morgan, Dale L. and Eleanor Towles Harris eds., 1967, *The Rocky Mountain Journals of William Marshall Anderson: The West in 1834*, San Marino: Huntington.
- Nuttall, Thomas, 1827, *An Introduction to Systematic and Physiological Botany*, Boston: Hilliard, Gray, Little, & Wilkins, & Richardson & Lord.
- Palmer, Joel, [1847] 1966, *Journal of Travels over the Rocky Mountains*, Ann Arbor: University Microfilms.
- Pattie, James O., [1831] 1984, *The Personal Narrative of James O. Pattie*, Lincoln/London: University of Nebraska Press.
- Peck, John Mason, 1836, *A New Guide for Emigrants to the West*, Boston: Gould, Kendall & Lincoln.
- Pike, Zebulon Montgomery, [1810] 1966, *Sources of the Mississippi and the Western Louisiana Territory*, Ann Arbor: University Microfilms.
- Tyrrell, Joseph Burr ed., 1916, *David Thompson's Narrative of His Explorations in Western America 1784-1812*, Tronto: Champlain Society [reprint by Kessinger].
-

【文献】

- 青山賢治, 2014, 「アメリカン・フロンティアの成立条件——アメリカの消費社会化に関する系譜学的分析——」『社会学評論』64(4) [掲載予定].
- Bakken, Gordon Morris and Brenda Farrington eds., 2000, *Where is the West?*, New York: Garland.
- Baudrillard, Jean, 1976, *Echange Symbolique et la Mort*, Paris: Gallimard. (=1992, 今村仁司, 塚原史訳『象徴交換と死』ちくま学芸文庫.)
- Chittenden, Hiram Martin, 1886, *The American Fur Trade of the West*, Vol. 2, Lincoln: Bison.
- De Voto, Bernard, 1952, *The Course of Empire*, Boston: Houghton Mifflin.
- , 1989, *The Year of Decision: 1846*, Boston: Houghton Mifflin.
- Evans, Howard Ensign, 1997, *The Natural History of The Long Expedition to the Rocky Mountains 1819-20*, New York: Oxford University Press.
- Foucault, Michel, 1966, *Les Mots et les Choses: Une Archéologie des Sciences Humaines*, Paris: Gallimard. (=1974, 渡辺一民, 佐々木明訳『言葉と物——人文科学の考古学』新潮社.)

-
- Goetzmann, William H., 1978, *Exploration & Empire: The Explorer and the Scientist in the Winning of the American West*, New York: Norton.
- Goetzmann, William H. and William N. Goetzmann, 1986, *The West of the Imagination*, New York: Norton.
- Lawson, Russell M., 2012, *Frontier Naturalist: Jean Louis Berlandier and the Exploration of Northern Mexico and Texas*, Albuquerque: University of New Mexico Press.
- Limerick, Patricia Nelson, 1994, "The Adventures of the Frontier in the Twentieth Century," James R. Grossman ed., 1994, *The Frontier in American Culture*, Berkeley: University of California Press, 67-102.
- McGlashan, Charles F., [1879] 1966, *History of the Donner Party*, Ann Arbor: University Microfilms.
- McKelvey, Susan Delano, 1956, *Botanical Exploration of the Trans-Mississippi West, 1790-1850*, Jamaica Plain: Arnold Arboretum of Harvard University.
- Slotkin, Richard, 1994, *The Fatal Environment: The Myth of the Frontier in the Age of Industrialization 1800-1890*, New York: Harper Perennial.
- Steward, George, 1960, *Ordeal by Hunger: The Story of the Donner Party*, Boston: Houghton Mifflin.
- Turner, Frederick Jackson, [1883] 1966, *The Significance of the Frontier in American History*, Ann Arbor: University Microfilms.